１９９８年１０月０９日　第三種郵便物認可　　（毎月３回８の日発行）
２０２３年８月１５日発行　ＳＳＫＵ　　増刊通巻　７６８６号

SSKU お元気ですか？ イリアンソスです。

2023 年度 夏号

Page2 理事長の散歩道

Page3 特集「のぞみの家×ヘラルボニー」

Page7 活動報告

１９９８年１０月０９日　第三種郵便物認可　　（毎月３回８の日発行）
２０２３年８月１５日発行　ＳＳＫＵ　　増刊通巻　７６８６号

連載　理事長の散歩道　㉚

「じぶんらしく」

社会福祉法人イリアンソス　理事長　磯部光孝

5月26日、のぞみの家の利用者だった田中美千代さんが亡くなりました。原因は詳しくはわかりませんが、その数日前彼女からメッセージが入っており「白内障の手術が無事終わったよ～」と連絡があったばかりだったのでびっくりしました。ご冥福をお祈りいたします。

わたしはのぞみの家の施設長として就任してから、田中さんと話をするようになりました。それ以前のわたしがこのみの職員時代にも、のぞみの家にはよく通っていましたが、あまり田中さんとは話をすることはなかったと思います。どちらかというとその頃の東久留米市の障害福祉事業所はすべて無認可事業所であったため、運営が厳しくどの事業所も補助金で足りない資金をバザーなどでねん出しており、そのバザーのお手伝いをよくしていました。また、障害児と夏の一日遊ぶ「サンサンフェスティバル」でのお化け屋敷を職員と一緒に企画していました。

１９９７年にのぞみの家が社会福祉法人イリアンソスとなり、定員が２０名の「身体障害者通所授産施設」の認可施設になりました。しかし、わたしは、それまで成人の方たちの支援はしたことがなく全くの素人でした。しかも認可施設になったのはいいのですが、利用される方が１４名と運営がぎりぎりの状況。そんな中、田中さんはのぞみの家を退所するという話を聞き、これ以上利用される方が少なくなると運営が厳しくなるため、それまであまり話さなかった田中さんに「戻ってくるだろう？」とお願いしてしまったことを思い出します。

本当に助けてもらったと思っています。

その後は、自らの障害が年齢を重ねて、身体が思うようにならなくなって、田中さん自身とても悩んでおられたように思います。わたしたちもいろいろと提案したのですが、身体を維持することも大変でのぞみの家を退所することになりました。

今、彼女が自費出版した「娘より」をもう1回読ませてもらいました。8歳のころに入所施設に入ったことの不安や入所施設を出て養護学校に通うために苦労されたこと。学校卒業前に授産施設の席が埋まらないうちに人里離れた施設に入って、ついて行けずやめてしまって在宅生活をしていたこと。そのあと友だちの勧めでのぞみの家に通ってきたことが書かれていました。さらに、のぞみの家を中心に東久留米で出会った仲間たちの話、そしてスウェーデンに3回も旅行に行った話なども書かれており、すごい人生を送ってきたんだなと改めて思いました。

わたしも田中さんとの話で一番印象に残っている話があります。田中さんは脳性麻痺で手足の動きに障害がありました。それでも初めてアパート暮らしをしたとき、自分で料理をしたそうです。フライパンでソーセージを焼いていたそうですが、自分で自分の料理を作ることがとっても嬉しくてフライパンを振るたびにうれしくてソーセージを落としてしまったそうです。うれしくなると自分の思った動きができなくて、最後には一つもなくなったことを楽しそうに語ってくれました。自分でやって自分で失敗することができた喜びは何事にも代えがたいといっていました。障害があると危ないからとかできないからとか支援者が先回りしてしまうことがよくあります。でもその人の人生はその人のもの。大げさかもしれませんが自己実現がその人の人生を彩るものだと田中さんの話から教わりました。1歳若い田中さんでしたが、わたしも自分の人生を自分らしく彩っていきたいと思います。ありがとうございました。

１９９８年１０月０９日　第三種郵便物認可　　（毎月３回８の日発行）
２０２３年８月１５日発行　ＳＳＫＵ　　増刊通巻　７６８６号

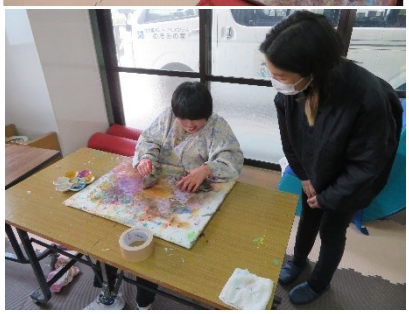
特集

おひさま班×ヘラルボニー

最近よく見かけるようになったヘラルボニーの作品、製品の数々。おひさま班が描いた絵画とも多数コラボレーションして、活躍しています。

○関わりを持った経緯

おひさま班が毎年出展しているきょうされん主催のグッズデザインコンクールがきっかけでした。おひさま班は毎年絵画を出展し何度か入賞、入選しました。ヘラルボニーが過去のグッズデザインコンクールの入賞作品を見て、「宮澤さんの絵画でTシャツを作りたいです」と声をかけていただいたのが始まりです。



○絵画をしている時に大切にしている事

絵画は、「自分の思いを絵画に乗せてみんなに伝えたい」ということを大切にしている表現活動です。テーマは事前に各アーティスト（おひさま班のメンバー）と話し合って決めます。体験したイベントや季節を感じながら描くことが多いです。また、色を決める際は「クリスマス会をしたときにチョコレートケーキを食べたから茶色にしますか？それともクリスマスツリーの緑？」と話しながら各アーティストがＹＥＳ／ＮＯを示し描きたい色で自分の好きなように全身で描きます。スタッフは道具に絵の具を付けたり、キャンバスを支えたりとアーティストが絵を描けるようにサポートするのみです。アーティストがいかに自分の思い通りに描いて表現できるかを大切にサポートしています。

○コラボしてみて利用者の変化

おひさま班では、ヘラルボニーからコラボレーションの案件依頼が来た時には必ずアーティストご本人もいる朝の会等で発表をします。そして、製品になったものをインターネット等で見てみんなで喜びを分かち合います。また、壁画になった際はアーティストと足を運んだり、製品が手元に届いたときは、お披露目会をし、実際に手に取って実感します。コラボの案件は各個人の絵画が使用されますが、採用された喜びはおひさま班全員で共有します。そして今度は自

分がコラボするぞとお互いを鼓舞します。発表した時の嬉しそうな表情、製品を手に取ってじっと見つめたり様々な姿で喜ぶ姿が見られるようになりました。また、発表した後はモチベーションが上がり、絵画活動ではいつも以上の力を発揮する姿もあります。絵画、ヘラルボニーを通して、多くの人との関わり、社会との強い繋がり、思いが伝わっている事を強く実感できるようになりました。（記：おひさま班職員　菅野優香）

○ご家族インタビュー

宮澤祥子さん母

今まで経験したことのないできごとでビックリしています。絵画が世に出て嬉しいです。作品だけだと娘の作品とあまりピンとこないですが、製品になって形になるのがいいですね。これもひとつの才能なのかなと思います。周りの人にも好評で、買いたい！との声もたくさんあります。たくさんの所でたくさんの人に手に取ってもらいたいです。

鈴木広大さんご家族

広大の絵を取り上げてもらい、多くの人の目に止めてもらうのはとても嬉しいことです。

菊地真歩さん母

自分の描いた絵が小さい頃から大好きだったミッキーの形になって、しかも素敵な商品になるなんて、本当に素晴らしい体験をさせていただきました！

○ヘラルボニーについて

「異彩を、放て。」をミッションに、福祉を起点に新たな文化の創出を目指すスタートアップベンチャー。国内外の主に知的障害のある作家とアートライセンス契約を結び、２０００点を超えるアートデータを軸に、福祉領域の拡張を見据えた多様な事業を展開。２０２２年に「日本スタートアップ大賞２０２２審査委員会特別賞」を受賞。

○起用させていただくアート作品について

ヘラルボニーの代表・松田（崇弥）は創業前、岩手県花巻市にある「るんびにい美術館」を訪れました。障害のある作家が描いたアート作品を目の当たりにしたとき、これまでにない衝撃が走ったといいます。

「障害があるからこそ描ける世界だ。」「異彩を、放て。」というミッションには、「障害」という言葉をあえて「異彩」と定義し直し、言い換えることで、障害のある人に対するネガティブな印象を払拭したいという強い想いが込められています。

１９９８年１０月０９日　第三種郵便物認可　　（毎月３回８の日発行）
２０２３年8月１５日発行　ＳＳＫＵ　　増刊通巻　７６８６号

作家たちが在るがままに「生きる」中に自由な線、色、形を発見していること。「自分の生きる姿」の写しとも言えるその魅力的な表現と作家の存在に、社会側が気づき、行動するきっかけを創り出したい。

ヘラルボニーでは、障害のある人を差別をしてはいけないという社会的基準の選択ではなく、ただ、アーティストとして素晴らしいという、ごく当たり前の価値をもってアート作品を厳選させていただき、その独創的な表現活動を応援しています。

２０２２年からは、金沢２１世紀美術館のチーフ・キュレーターである黒澤浩美氏をアドバイザーに迎え、アート作品たちの正当な評価を底上げし続けています。

○コラボレーションについて

ヘラルボニーがやろうとしているのは、支援やボランティアではなく、あくまでもビジネス。

自社ブランド「HERALBONY」でこだわりの素材とデザインによって創り出されるプロダクトは、価値に見合う正当な価格で販売され、売り上げの一部はライセンス料として施設・アーティストに支払われます。

のぞみの家 おひさま班の作家の皆さまは、一人ひとりの特性にもとづく、全身を使った創作活動に取り組んでいらっしゃると聞いています。

絵の具の種類、キャンバスの種類も多様でありながら、筆以外にもスタンプ、ローラー、スポンジ等の工夫が凝らされたさまざま画材を使い、大胆で華やか、それでいてどこかあたたかく優しい印象の作品たちが生み出されています。

これにより生み出される特徴的な作風は、ヘラルボニーが契約する他施設の多くの作家とは一線を画しています。

老若男女を問わず幅広い層の人々の心に留まる抽象画として、ヘラルボニーの創業期から社内のデザイナーだけでなく、多くの企業様にも指名をいただいています。

これからも、日々変化を続けていくおひさま班の作家の皆さまの作品を、ご家族の皆さま、そして施設の皆さまのお力添えをいただきながら、たくさんの方に届けてまいります。（記：ヘラルボニー）

（上）鈴木広大さんの作品を起用した、自社商品
（中）鈴木和也さんの作品を起用した、卓球日本代表・伊藤美誠選手のユニフォーム
（下）松本真由美さんの作品を起用した、東京・明治通り沿いの IoT ゴミ箱「SmaGO」のデザイン

１９９８年１０月０９日　第三種郵便物認可　　（毎月３回８の日発行）
２０２３年8月１５日発行　ＳＳＫＵ　　増刊通巻　７６８６号

きょうされん　とうきょう大会

五月十二日、きょうされんとうきょう大会にオンラインで「うたって　おどって」の交流分科会に参加しました。参加にあたり、利用者へは事前に内容を説明し、歌のプログラムは利用者の関心を集め、紙面で一人ひとりに渡した資料には思い思いのマーカーが引かれていたり、当日を迎えるまでプログラム上にあった曲名を口にしていたり、「これ、最後にうたうんだよね」と期待がふくらみました。

いざ当日。オンラインのため会場の音声が聞きとりづらい時は、かなえバージョンの“うたって　おどって”のコーナーに早変わりし、オリジナリティあふれたカラダの動きや表情豊かに、心の内を表現することができました。

生活寮バーベキュー

生活寮うみ・そらのウッドデッキにてバーベキューをおこないました。コロナで中止となっていた恒例行事を三年ぶりに開催することができました。準備の段階から入居者の皆さんは、今か今かと待ち遠しい様子でした。スタッフも久しぶりの行事で慌ただしくも楽しく準備をすすめていました。笑顔あふれるイベントとなりました。

生活の場だからこそできる行事やイベントをこれからも大切にしていきたいと思いました。

１９９８年１０月０９日　第三種郵便物認可　　（毎月３回８の日発行）
２０２３年8月１５日発行　ＳＳＫＵ　　増刊通巻　７６８６号

ファミリーレター

イリアンソスの利用者さんのご家族に幼少期のお話やお子さんへの想いなどをお聞きしました。

今回は、「活動センターかなえ」の満園晃大（みつぞのあきと）さんのお母さまとお父さまにお話を伺いました。

長女が一才八ヶ月の時、晃大がうまれました。三月生まれの年子で、いつもオンブしていました。二才半になっても発語がなく、どこでもよじ登り、靴・靴下が大嫌いでした。三才一ヶ月でわかくさ学園に入園し、先生方の温かい指導に支えられ、私も先輩のお母さん方の背中を追ってきました。今のような放課後等デイサービスは少ない中、かるがもや移動支援、日中一時支援など教わり、利用できて、家族みんなが助けられました。本人も小さい頃からの様々な人との関わり、集団の経験が成長につながり、生活の幅を広げてもらいました。

本当にありがたく思っています。

ふり返れば、目の離せない子だった故に日々に追われ、悩む事は案外少なかったかもしれません。でももう二十四才、共に歩むことがあと何年出来るのか考えるようになりました。かわいいけれど、世話や見守りはやはり大変です。

夫や娘とともに、苦労をいたわりながら暮らしていきたいと思います。（母より）

コロナになって自主送迎が推奨され、運動不足の解消にもなるので、積極的に歩いて通所するようになりました。すると送迎バスの時ほど時間を気にしなくても良くなりました。息子の睡眠のムラには、今でも家族で困っています。朝方早く起きてしまい、いざ通所する時間に眠ってしまった時など、送迎バスに乗せるのが大変でした。自主送迎だったら、少し早めに出たり又は少し寝かせてスッキリさせてから歩いていけば良く、焦らずによくなりました。

考えてみれば、決められた時間に決められた場所に行くというような、社会的にせねばならない事で、息子に強く当たり過ぎたような気がします。もちろん、ルールを守ってもらわないとお互いに生活しづらくなるような事は、今でも守ってもらうようにしていますが、ごく自然に生きている息子に、色々な場面で無理矢理、こちらの考えや要求をおしつけてなかっただろうかと、考えさせられる事、気づかされる事が、自主通所をするなかで沢山ありました。効率的な道でなくても、息子の行きたいように任せてみるのは、息子も、自分も楽しめて、とてもよいです。また、言葉でのおしゃべりは出来ませんが、毎日一緒に歩く事によって、なんとなく通じるモノがあり、なんだかニコニコしながら歩いたりして、コロナ前より、息子と近くなれたような気がします。（父より）

１９９８年１０月０９日　第三種郵便物認可　　（毎月３回８の日発行）
２０２３年8月１５日発行　ＳＳＫＵ　　増刊通巻　７６８６号

ご寄付をいただきました（６月末まで）
法人各施設にご寄付をいただいております。誠にありがとうございました。
いただいたご寄付は法人各施設の充実や、将来構想の資金として大切に使わせていただきます。

藤田祐子様

ありがとうございます。

社会福祉法人イリアンソス

●のぞみの家
東久留米市下里２－７－１８
０４２－４７３－９０２７
０４２－４７３－９０３６（F）
nozomi@iriansos.or.jp

●活動センターかなえ
東久留米市南沢２－２０－５１
０４２－４５２－６４０５
０４２－４５２－６４１５（F）
kanae@iriansos.or.jp

●なかまの家
東久留米市中央町２－１－４７
０４２－４７２－７１３０
０４２－４４４－３７２２（F）
nakama@iriansos.or.jp

●生活寮「うみ」「そら」
東久留米市下里４－２－７
０４２－４７６－３４００(F兼)
sora@iriansos.or.jp

●生活寮「にじ」「かぜ」
東久留米市下里５－１０－１０
０４２－４２０－９９４３
kaze@iriansos.or.jp

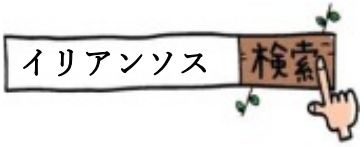
●このみ
東久留米市幸町３－８－２３
０４２－４７３－９６６７

～編集委員のつぶやき～
街中で送迎車を見つけ手を振るこのみの卒業生。僕は元気だよと言わんばかりの笑顔を見せてくれた。偶然にも今日、他の卒業生が玄関に突然の訪問。皆喜び集まる輪。彼らの笑顔が頑張れと私の背中を押してくれる。

津田雪枝（このみ）

《発行》
特定非営利法人障害者団体定期刊行物協会
〒157-0072　東京都世田谷区祖師谷 3-1-1
ヴェルドゥーラ祖師谷 102 号室
Tel 03-6277-9611/Fax 03-6277-9555
《企画、編集》
社会福祉法人　イリアンソス
〒203-0043 東京都東久留米市下里 2-7-18
Tel 042-473-9027/Fax 042-473-9036
《編集委員》
磯部光孝・小林玄斎・斎藤加奈子・斎藤尚志
多田由美・津田雪枝・疋田史江・室澤隼也・吉田遊佑

※ホームページからもご覧いただけます。



定価100円

表紙の写真　「なかまの家」（生活介護）
（左）理学療法士の先生に体操を教えてもらっています。真剣な表情で動きを覚えて身体を動かします。
（右）リラクゼーションの足浴も、皆さん大好きです。